

日本獣医学会学術集会における研究成果報告

ケストースの生理機能に関する共同研究成果が、2017年9月13日(水)から15日(金)にかけて開催された第160回日本獣医学会学術集会にて発表されました。

[発表日]
2017年9月15日(金)

[演題]
「ケストースのイヌ腸内細菌叢に対する影響」

[発表者関連研究機関]
東京農工大学、東京農業大学、物産フードサイエンス

[発表概要]

これまでの研究により、ケストースはヒトやマウスの腸内有用菌を増加させることが報告されているが、イヌにおける効果についての報告はなかった。そこで本研究では、ケストースのイヌ腸内細菌叢に対する影響を検討した。

イヌにおける各腸内細菌の占有率を解析した※1結果、ケストース投与後4週間から12週間にかけて、乳酸菌 (*Lactobacillus*属) およびビフィズス菌 (*Bifidobacterium*属) の占有率が顕著に増加していた。これらの菌は、イヌの腸内において有用菌とされている。また、これらの菌はケストースの資化性が高いという報告があることから、イヌ腸内における乳酸菌、ビフィズス菌の占有率の増加とケストースには関連があると推測される。さらに、これらの菌数を定量した※2結果、乳酸菌は投与8週間後に、ビフィズス菌は投与4週間後に菌数が増加した。また、イヌの腸内において病原菌として知られるウェルシュ菌 (*Clostridium perfringens*) は投与4週間後に測定限界以下まで減少した。

ケストースを投与したイヌの腸内では有用菌が優勢になることから、ケストースがイヌの腸内環境を改善することが示唆された。今後、ケストースのペットフード関連品展開の可能性が期待される。

※1…メタゲノム解析による解析 ※2…リアルタイムPCRによる定量

[お問い合わせ先]

物産フードサイエンス株式会社 研究開発センター
TEL : 0562-55-1629